

# 自由会話の特徴

## —高年層と若年層を対象として—

太田有紀

### 1 調査目的

今回の調査では、気仙沼方言における会話の特徴を見出すべく、自由会話を収集し分析を行った。方言研究においても会話の分析はこれまで多々行われてきたが、本報告では、これまでの方言研究にあまり用いられていない会話分析という方法を用いて気仙沼方言の会話を分析していく。分析の際には、turn-taking 及びあいづちの出現傾向、そして会話の主導権という観点を用いた。

turn-taking やあいづちは、言うまでもなく会話を進めるうえで必要不可欠なものであり、会話を構成する基本的な要素である。にもかかわらず、これらに着目し会話の地域差について論じている研究はまだあまり見られない。

新たな分析視点や方法を用いて方言会話を分析することで、今まで見えてこなかった会話の地域的特徴を解明していくことが可能になると考える。よって本報告は、上記の分析視点から当方言会話がどのような特徴を持っているのか、また世代によって異なる傾向を持つのか明らかにする。

しかし、データ数や分析時間の関係上あくまで傾向を見出すにとどまっており、今後、気仙沼方言における会話の特徴として一般化できるのか検証する必要がある。さらに、気仙沼方言以外の会話の特徴と対比させ、会話の地域差がより明確に示せるようにしたい。

なお、本報告で用いるデータは高年層と若年層の自由会話場面である。今回収集したデータは高年層(以降データ提示の際は O)1 本、若年層(以降データ提示の際は Y)2 本の 3 本だが、分析の関係上、過去の気仙沼調査の会話データ<sup>注1</sup>も使用し、高年層 2 本、若年層 2 本の計 4 本を文字化<sup>注2</sup>し分析対象とした。使用したデータの詳細を以下にまとめる。

〈表1 分析データ〉

	O-1	O-2	Y-1	Y-2
M (男)	昭和12年(75歳)	昭和25年(66歳)	平成4年(24歳)	平成6年(23歳)
F (女)	昭和16年(71歳)	昭和32年(60歳)	平成4年(24歳)	平成7年(22歳)
分析時間	約25分	約30分	約31分	約32分
収録時期	2012年8月	2017年8月	2017年8月	2017年8月

(収録時年齢)

なお、会話参加者同士は知人であり、会話のテーマは自由である<sup>注3</sup>。会話に困ることも考慮し、参考になりそうなテーマを被験者の見えるところに提示した。

### 2 総論

本節では、分析で得られた気仙沼方言における会話の特徴を論じる。2.1 節では turn-taking を、

2.2 節ではあいづちを、最後の 2.3 節では、先の 2.1 節と 2.2 節を踏まえ会話の展開方法について述べていく。分析にするにあたり必要な認定基準や分類については、各節で論じる。

## 2.1 turn-taking

turn-taking とは話者交替や発話交替、発話順番などと呼ばれるものである。話し手が話始めてから次の話者が話始めるまで（あるいはポーズによって区切られるまで）が 1 つの turn（発話）であり、あいづちは turn-taking には含まない。さらに、上昇音を伴った発話と、その直後に現れる発話は 1 つの turn とみなす。

以下、例を挙げ簡単に turn 及び turn-taking について説明する。

### 【例1】

01M [\*]\* \* いった何イチパチ打ちて:とかづって

02F は::::::::::::これを機にやめさせよう.

03M やめね:よhh[h].h\* \* \* はやめないと思う(0.87)

この例では、01M、02F、03M それぞれが 1turn である。そして、01M から 02F へ話し手が移っている状況が話者交替すなわち turn-taking である。02F と 03M の関係も同様に、F から M に話者が移っていることから turn-taking が生じているということになる。以下、データに見られた turn-taking の出現傾向について見ていく。

表 2 は、各データにおける turn-taking の出現数と、1 分間あたりの出現回数を示したものである。データによって出現数に多寡があるため、傾向を探るという点で 1 分間あたりの出現

〈 表2 turn-takingの出現数 (回) 〉

	O-1	O-2	Y-1	Y-2
出現数	199	276	218	421
1分間当たり	8.0	9.2	7.3	14.0

数を求めることにした。その結果、Y-2 以外の 3 つのデータで 1 分間に 8 回前後 turn-taking が出現しておりほぼ同様の傾向が見られた。高年層と若年層に違いがあるかどうかについては、現時点で明言することは難しく今後データを増や傾向を見ていく必要がある。

さて、turn-taking と一言に言ってもその出現状況が同じであるとは考えにくい。したがって、turn-taking が生じた状況を大まかに分類し気仙沼の会話の特徴がみられるのか探ることにした。

まず、データの観察から、上昇音を伴った発話かどうかという点で大きく 2 つにわけた。そして、上昇音を伴っている発話でも①同意や確認といった話し手が主体となる状況の turn-taking か、②質問や聞き返しのような聞き手が積極的に関わる状況の turn-taking であるかという点で 2 に分類した。

以下、その 3 つの状況を実例を挙げ説明する。

### (A) 上昇音を伴わない turn-taking

紙幅の関係上再掲は避けるが、これは先に提示した例 1 のような 1 つの発話が終わり次の話者が話始めるようなものである。turn-taking の中でも最も基本的なものである。

(B) 上昇音を伴った turn-taking

① 同意・確認

これは、自己確認や他者確認、同意要求などをするとき用いられるもので、質問や聞き返しのように具体的な問いと応答の関係を持たない turn-taking である。

【例2】

- 01M ん:hよっくみだっけファミリーなんてさh
- 02F °うん°
- 03M 弟どしかいねちや?
- 04F °うん°
- 05M 子供だち2人だちや?そのうちh都合あつがら誰もこれねちや?
- 06F うん

例2は、法事などがあっても家族がなかなか集まれず、昔ながらの伝統を守っていくのが難しいことを話している場面である。ここで、上昇音を伴った発話は03Mと05Mであるが、どちらも共通語の「・・・でしょ?」のような意味で用いられている。今回の分析では→箇所の応答部分に着目し、「上昇音の発話－応答発話」の関係で1回 turn-taking 生じていると認定している。

② 質問・聞き返し

上記①の turn-taking とは異なり、質問や聞き返し等具体的な説明や応答を要求する turn-taking である。

【例3】

- 01F [えっ]バドミントンしたの?
- 02M したした
- 03F どこで?(0.45)
- 04M えっ(1.15)毎日どっかでやってっか[ら]

これはMの生活について話している場面である。Fは01と03でMに質問し、Mは02と04の質問に対する応答をしている。この場合も先の①の認定と同様応答部分に焦点を当て、「質問発話－応答発話」で1回 turn-taking が生じていると認定している。

さて、上記の分類をもとに出現傾向をまとめたものが表3である。

〈 表3 状況別turn-takingの出現割合 〉

分類	O-1	O-2	Y-1	Y-2	
(A) 上昇なし	83.4%(166)	81.1%(224)	74.8%(163)	67.2%(283)	
(B)	①確認・同意	15.1%(30)	14.9%(41)	12.8%(28)	8.3%(35)
	②質問・聞き返	1.5%(3)	4%(11)	12.4%(26)	24.5%(103)
合計	100%(199)	100%(276)	100%(218)	100%(421)	

( )内の数字は実数

上記より、高年層若年層共に(A)の上昇音を伴わない turn-taking が最も多く出現していることが

わかる。次いで高年層では(B)の①確認・同意の turn-taking が約 15%出現しており 2 つのデータの傾向は一致している。

一方、若年層のデータでは上昇音を伴った turn-taking の 2 つの合計が 25%~30%強の値で現れており、話し手から聞き手への働きかけ、聞き手から話し手への働きかけが高年層よりも頻繁に行われていることが明らかとなった。若年層と高年層の特に大きな違いとして 質問・聞き返しの turn-taking の使用が挙げられる。

以上、turn-taking が生じている状況の異なりを見たが、この違いは会話を展開させるうえでも影響を与えている可能性があると考えられる。

## 2.2 あいづち

あいづちは、その認定基準が研究者によって異なる。本報告では比較的広く捉え、表現形態による分類と生起位置から比較的客観的に認定することが可能である Den, et.al(2011)を用いた。しかしこれには笑い<sup>注4</sup>や turn-taking に関わるあいづち<sup>注5</sup>についての基準については記述がない。よって適宜変更を加えている。

表 4 は各データにおけるあいづちの出現数と 1 分間におけるあいづちの出現回数を求めたものである。この表から、1 分間におけるあいづちの出現数は、Y-1 を除く 3 つのデータでは 12%~14%と同様の傾向を示している。Y-1 は他のデータよりも少ないが、この結果から、あいづちの出現傾向には世代による大きな差は無いと考えられる。

〈 表4 あいづちの出現数 (回) 〉

	O-1	O-2	Y-1	Y-2
出現数	303	419	273	387
1分間当たり	12.1	14.0	9.1	12.9

〈 表5 地域若年層のあいづちの出現数 (/分) 〉

	データ1	データ2	データ3	データ4
大阪	9.3	9.5	10.7	14.9
東京	8.5	9.4	11.7	11.6

また、当方言の 1 分間当たりのあいづちの出現は多いのか少ないのか不明であったため、参考までに、他地域の若年層のデータと比較してみることにした。他地域若年層の 1 分間における出現回数を表 5 に示す。

表 4 と表 5 の比較より、東京よりは気仙沼の方が若干多いことがわかるが、大阪と気仙沼ではほぼ同じような出現傾向であった。

## 2.3 会話の展開方法

当方言の会話を観察すると、turn-taking がある程度出現しているにも関わらず、大阪や東京のように活発な会話が展開されていないように思われる。

よって本節では、2.1 節と 2.2 節で述べたことを踏まえ気仙沼の会話がどのように展開されているのか考察する。以下、高年層、若年層の順で傾向を述べる。

### 【高年層】

高年層の会話では、同意や確認の上昇音に関わる状況で turn-taking が出現する傾向があること

は 2.1 節で述べた。この同意・確認の上昇音の場合、「同意・確認発話→応答発話→(先の話しての)発話の継続」という流れで会話が続いていくことが主である。同意・確認発話の後に現れる応答は単純なものが多く、応答発話を行った話し手がそのまま turn を保持することは稀である。つまり、モノログ場面に非常に近い状態で会話が開かれる傾向があると言える。

下記例 4 は、震災の時のことを話している場面で、矢印のついている 01M と 05M が同意・確認の上昇音を伴った発話(下線部太字)である。上昇音を伴った発話の後には、F が「はいはい」という単純な応答をしている。上昇音を伴った turn-taking でもこの①のタイプは、聞き手だった発話者が turn を保持し会話を展開させていくことは無く、もとの話し手が再び turn を取り発話を継続しており、会話を積極的に展開させるようなものでないことは明らかである。

【例 4】

→ 01M	まずあのそん時あの (0.35) 電気も切れた <u>でしょ?</u> =	同意・確認	] I
02F	=はいはい	応答	
03M	その：今度は水道も止[まる]	発話継続	] II
04F	[水]道も止まったし[ね]	あいづち	
→ 05M	>[あの]こ-<あの (0.5) ど = <u>同意・確認</u>		
	=こがばー破裂した <u>からね?</u>		
06F	はいはい	応答	

同意・確認の turn-taking では、例 4 の右端に示した通り少なくとも 2 回の turn-taking (I と II) が関わっている。つまり上昇音を伴わない turn-taking の約 15% は、II のような turn-taking であると言える。

また、2.2 節で述べた通り気仙沼会話ではあいづちが比較的多く出現している。この点からも会話の展開は turn-taking のやり取りが活発でなく互いに話を聞きながら会話が展開されていく可能性が高い。

以上のことから、気仙沼の高年層の会話の傾向を考えると、話し手が会話の主導権を握り、聞き手の反応を引き出しながら会話を進めている傾向があると言える。言い換えれば、聞き手は話し手から turn を譲られるまであいづちを主に用いて、話し手が持つ会話の主導権 (floor) を維持するということである (受け身的な会話の展開)。

【若年層】

若年層の会話では、同意・確認の上昇音の出現も観察されたが、それと同様かそれ以上に、質問・聞き返しといった状況での turn が観察された。

質問や聞き返しの場合、現在進行している発話内容についてのものが主である。つまり、turn-taking は生じているが、基本的には話し手の発話内容に沿った形で聞き手が質問発話を行い会話を展開しているわけである。

質問・聞き返しの例として例 5 を挙げる。例 5 は、M の住む町について F がどんな街か質問した

場面である。ここでは 03F と 06F が質問の発話になっており、F の質問に M は 05 と 08 で応答している。

ここで重要なことは、M の住む町について詳しいことを F は知らない。よって質問に答えるのは話者となった M であるにも関わらず、質問を矢継ぎ早に浴びせる形で F は町の様子を聞きだそうとしている点である。これは、本来の話し手である M に会話の主導権を持たせたまま、F が質問を用いて、会話を進め M の持つ会話の主導権(floor)を維持していると考えられる。

- 【例5】**
- 01M どう:(0.49)防潮堤が:[で]きたらしい(0.98)  
02F [うん]  
→ 03F えh[hh見]た?見た?見て[ない]の?(0.41)  
04M [hhh] >[なんだ?]<  
05M 見るとあるような気もするけど(0.57)  
→ 06F すーえっ[そんなに]目立ってないの?そんなでか(. くない? =  
07M [そもそも]  
(06F) =高[くない]?  
08M [ん::]:>なんか大谷海岸=  
(04F)は04F からの続きの発話であることを示す)

以上より、若年層の会話では話し手が聞き手に働きかけながら会話を展開する高年層と同様の傾向を持つと共に、聞き手が、質問や聞き返しを積極的に行うことで情報を聞き出し、話し手の会話の主導権を奪うことなく話を展開していく傾向があると言える(受け身的にも積極的にもなる2面性を持った会話の展開)。

## 注

- 『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集—宮城県沿岸15市町—』の宮城県気仙沼市自由会話より。今回のデータではO-1にあたる。
- 文字化に使用した転記記号は資料参照のこと。
- 過去の調査で収録した会話は「震災のときのこと」テーマを設定している
- 笑いもあいづちのように用いられることから、音声で聞こえる範囲で認定した。
- turn-takingに関わるあいづちは、前の発話の直後に現れ、かつ、あいづち表現の発話後0.3秒以上の間があった場合、発話時の音調や発話内容を検討したうえで最終的にあいづちか否かの認定を行った。

## 資料

文字化の際の転記記号を以下に示す(串田他編(2005)を参考に必要に応じて変更)。

- ? 上昇調のイントネーション . 下降調のイントネーション  
: 音が伸ばされている状態を示す (…) 発話が不明な部分を示す  
[ 二人の発話の重なるの始まる場所 ] 二人の重なるの終わる場所

- (0.3) 0.2 秒以上の沈黙の長さを( )の数字で示す ( . ) 0.2 秒以下の沈黙  
 hhh 笑いを示す . h 吸気音を示す  
 → 注目箇所を示す \*\* 固有名詞に関するもの  
 >< 記号で囲まれた発話は他より速度が速いことを示す  
 <> 記号で囲まれた発話は他より速度が遅いことを示す  
 ° ° 記号で囲まれた発話は他より小声で話されていることを示す  
 = 言葉と言葉、発話と発話が途切れなくつながっている個所を示す  
 ↑ 次に現れる発話が高い調子から始まっていることを示す

## 文 献

- 太田有紀(2015)「地域によるあいづちの差異—floor との関係から—」『国語学研究』55
- 串田秀也・定延利之・伝康晴編 (2005)『シリーズ文と発話1 活動としての文と発話』ひつじ書房
- 伝康晴(2015)「第5章 対話への情報付与」『講座日本語コーパス3 話し言葉コーパス 設計と構築』朝倉書店
- Den, et al. (2011) "Annotation of Japanese response tokens and preliminary analysis on their distribution in three-party conversations." *Proceedings of the 14th Oriental COCOSDA*,168-173.
- 東北大学方言研究センター編(2013)『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集—宮城県沿岸15市町—』